

寄稿:辻卓也(サーカス村協会会員)

生活と文化、行く末やいかに？

文楽は劇団四季の『ライオンキング』に学ぶべきだ、とTwitterでつぶやいていたのは、維新の会の代表代行になった橋下氏でした。彼は、文化はマーケティングリサーチで育ち、教育現場に競争と市場原理を持ち込んで、子供たちの尻をたたいて大企業や資本家が使いやすい人間に育てれば、未来の国際競争に勝てると考えている新自由主義者でもあり、彼が率いる維新の会は、先進国の中でもきわめて貧困率が高い我が国で、徹底したポピュリズムと競争原理で小泉竹中時代の自民党政権より、さらなる弱肉強食の社会と小さな政府を目指す保守政党です。さらに「小異を捨てて大同をとる」と言いながら、原発もTPPも消費税もすつとばして悲願の憲法改正を果たし、集团的自衛権の行使、核武装、徴兵制で日本を戦争の出来る国にしたい石原氏と手を組みました。14年にわたる都政において石原氏は、女性、身障者、同性愛者、アジア人に対する差別発言を繰り返し、オリンピックやカジノなど、マスコミを利用して派手な事を声高に宣伝する一方で、シルバーパスの有料化、寝たきり高齢者に対する福祉手当を廃止、障害者医療費助成を縮小、特別養護老人ホームの補助削減、盲導犬飼育代の削減、盲ろう者の為の通訳者養成講座を廃止、私立保育園に対する運営費補助の削減、都立病院の統廃合など、マイノティーや社会的弱者を踏みにじりながら、福祉、保険、文化関連などの施設を廃止、教育現場に対する恫喝と脅迫を繰り返してきました。彼らが次の衆院選で与党になれば、ますます弱者は切り捨てられ、多様な文化芸術が育つ土壌は痩せこけて行くのではないかと危惧しています。福祉は自由経済活動の敵となり、市場原理と相容れない文化芸術は非合理的な活動とみなされ、文化芸術に対する国の予算はますます縮小されるかもしれません。

先日行なわれた自民党総裁選の候補者5氏全て原発推進だった中で、もっともタカ派の安部氏が総裁に選ばれ、石破氏が幹事長になったことで、自民党は原発推進政党のみならず、きな臭い極めて偏った政党になってしまいました。彼等がぶち上げた憲法改正草案は、権力者の意向次第で、集会、結社、言論の自由を制限することができ、公の秩序や公益という具体性の無い、権力側に都合良く解釈可能な概念が、私たちの基本的人権よりも優先される内容になっています。また、政調会長には経産省に太いパイプを持ち、原発推進の旗振り役のような甘利氏が就任しました。福島第一原発の事故でこれだけ多くの日本人が辛い思いをしてきたにも関わらず、同じ日本人がこの原因を作ってきた原子力村と経団連の走狗のような党に、また政権を戻そうとしています。信じ難い思いです。

右傾化と極端な資本主義経済によってもたらされる社会は「生き残るため」の価値観に支配

された、多様性と文化的土壌に乏しい寛容とは言い難い社会です。経済的な豊かさを第一として必死に競争して、ゲームに勝っても負けても自己責任にしたい人にとっては良いかもしれませんが、ただ、このゲームのルールは万人に公平に用意されているわけではありませんし、競争に参加したくない人や、そもそも参加出来ない人を無視した一方的なゲームです。どんな人も存在を否定される事なく、異文化に敬意を持った寛容な世界を目指すために、もう一度冷静に考えたいと思います。

自覚に乏しいマスコミがこぞって「第 3 極」という言葉を使いますが、欧州で常に警戒されている極右勢力の台頭と何が違うのか、私には良くわかりません。欧州と違うのは有権者に、右傾化に対する危機感が薄いことかもしれません。「隣国の脅威にさらされている」という警句で人心を惑わせ熱狂させるのは、昔からどの国でも行われてきた、権力者の常套手段です。自民党と維新の会が衆参で 3 分の 2 の議席を確保したら、憲法改正に着手し、私たちの子や孫は軍隊に取られ、自衛という名のアメリカの戦争に都合良く巻き込まれるか、戦争する相手が居なければ、チェルノブイリの事故の時のように、福島原発の事故処理作業に動員させられるかもしれません。私たちがどれだけ子や孫達の幸せな未来を祈ったとしても、今まさに同じ手で、最も大切な未来の一部を奪う事になるかもしれません。私たちの忍耐力と想像力の無さが、未来に何をもたらすのかわかりませんが、とにかく今、いよいよ瀬戸際の世界を生きていることは確かだと思えます。